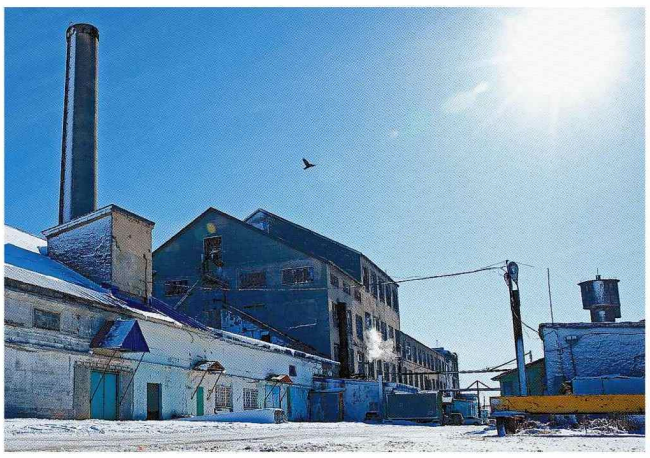

㊨日甜士別製糖所。屋根を3層にしたり増築した部分はあるが、基本構造はこちらもほぼ完成当時のままだ㊧サハリンの菓子工場の外観。工場完成当時からほぼ変わらぬ姿

双子工場 日ロで健在

旧明治製糖が1936年建設

ユジノ・菓子工場

日甜士別製糖所

ロシア・サハリン州のユジノサハリンスク市に古い三角屋根の菓子工場がある。実は特徴あるこの建物、士別市の日本甜菜製糖（日甜）士別製糖所とうり二つだ。それもそのはず、1936年（昭和11年）にほぼ同じ設計で建てられた。双子の工場はロシア（旧ソ連）と日本で戦中戦後の混乱を乗り越え、ともに現役でフル稼働している。

（ユジノサハリンスク・相内亮、士別支局・倉貫真一郎）

年末年始向けの菓子生産に追われる「サハリンの菓子職人２」の工場。リディヤ社長（右）とネルリ副工場長（北波智史撮影）

にちよう特報

売却乗り越え 今も活気

市民愛する地場産業に

ユジノサハリンスク市街地北部にある菓子工場はこの時期、年末年始向けの菓子生産に追われる。外観は灰色にくすんだ印象だが、中はきれいに塗装されている。甘い香りが漂う中、約80人の従業員がチョコレート菓子やフルーツゼリーを生産している。

「日本人が建てたこの工場を、手を入れながら大事に使ってきた。そろそろ外壁もきれいにしようと思っている」と、菓子メーカー「サハリンの菓子職人2」のマリナ・リディヤ社長(57)は言う。勤続45年のビレンスカヤ・ネルリ副工場長(65)も「目をつぶって工場内を歩ける。自分の家のよう」と笑顔を見せた。

サハリン州唯一の菓子工場で、製品の多くに「チェーホフ山」「白鳥湖」など地元の地名が付く。住民愛着のブランドだ。

製紙は停止

戦前の製糖工場の歴史に詳しい熊本県立大の辻原万規彦准教授（建築史）によると、この工場は、当時の日本政府の樺太拓殖計画にテンサイ振興が盛り込まれたのを受け、36年に明治製糖（現在の大日本明治製糖）などが出資した樺太製糖の豊原（ユジノサハリンスク）工場として建てられた。

リディヤ社長によると、日本の敗戦で45年に旧ソ連に接収された後、マカロニを製造する国営工場に転換。67年ごろから菓子生産も始め、91年の旧ソ連崩壊による民営化を経て96年から菓子に一本化した。

サハリンには日本時代に建てられた製紙工場が九つあったが、いずれも旧ソ連崩壊後、市場競争に太刀打ちできず、操業停止になった。サハリンの日本建築に詳しい北大スラブ研究センターの井潤裕学術研究員は菓子工場が残った理由について「菓子工場として生まれ変わり、市民が愛着を持つ地場産業となったことで、今も現役でいることができた」とみる。

大事に使用

一方、同じ三角屋根で4階建ての日甜士別製糖所。1月末ごろまで続く24時間態勢での操業に活気づく。

サハリンと士別の両工場がうり二つなのは、士別も元は明治製糖の工場だったからだ。辻原准教授は「明治製糖が同じ年に建てた二つの工場が同型になったのは当然と思われる」。

士別の工場は戦争激化に伴う農家の出征などで原料のビート調達が難しくなり、44年に明治製糖傘下の北海道興農工業（北興農）に売却。戦後の47年に日甜に社名変更した。

同じ年に同じ形で誕生し、それぞれ苦難の歴史を生きてきた双子の工場。日甜士別製糖所の佐藤和彦所長はサハリンの工場について「砂糖と菓子の違いはあるが、工場が健在なのは感慨深い。ぜひこの目で見てみたい」という。

サハリンのリディヤ社長は「建て替え？　ない、ない。日本人が丈夫に建てた。私たちが大事に使っていることを日本人が知ると喜んでもらえると思う。それがうれしい」と話している。

(C) 北海道新聞社　無断転載、複製および頒布は禁止します。
相内　亮　2013/12/03 01:38:17